れきみん
となん歴民だより vol.35

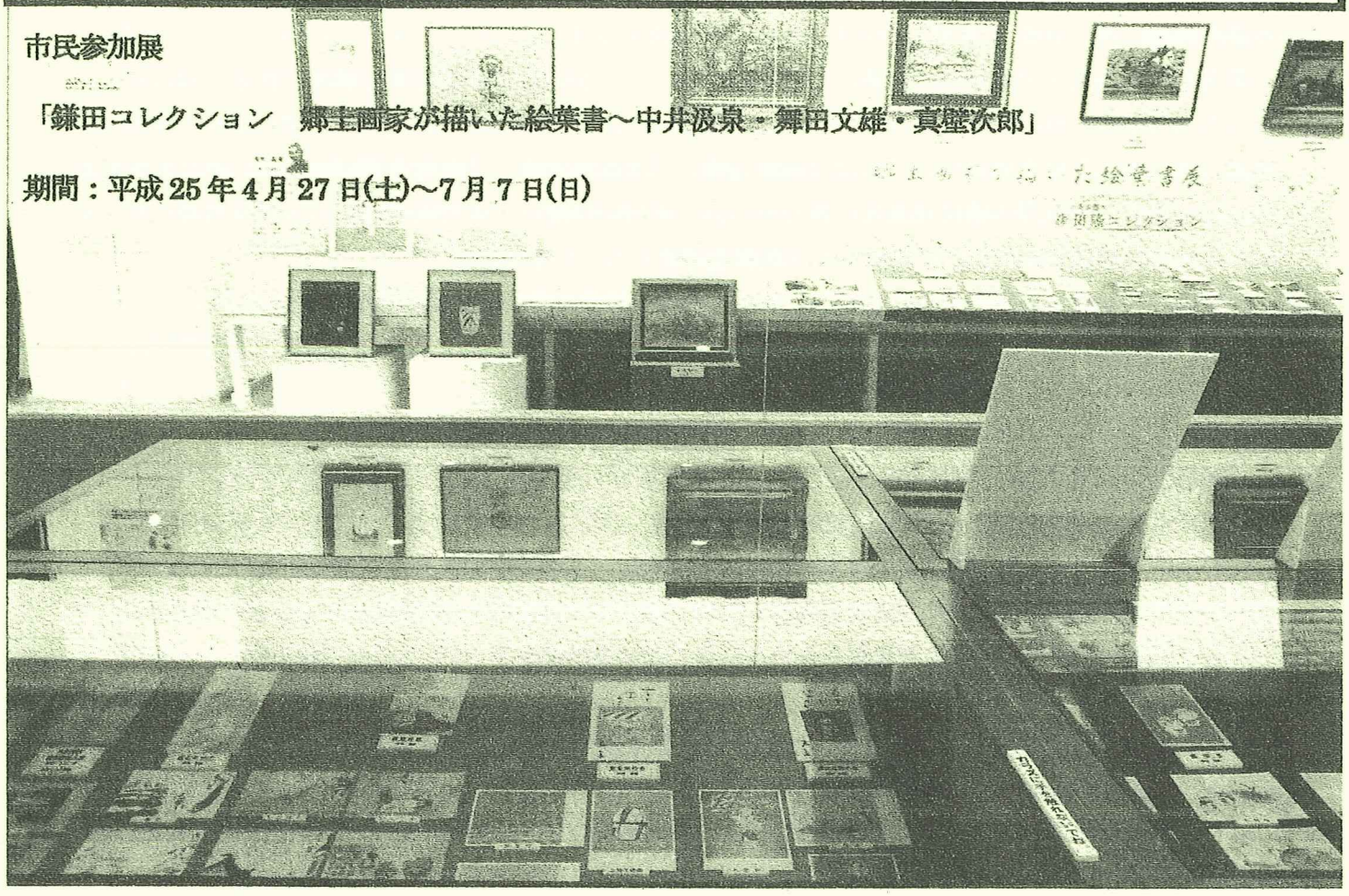
Morioka tonan history and folklore museum　平成25年6月28日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢 1-1-38　Tel/Fax 019-638-7228

市民参加展

「鎌田コレクション　郷土画家が描いた絵葉書～中井汲泉・舞田文雄・真壁次郎」

期間：平成25年4月27日(土)～7月7日(日)



是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

・当館館長　玉川　英喜
「都南の遺跡（その3）」

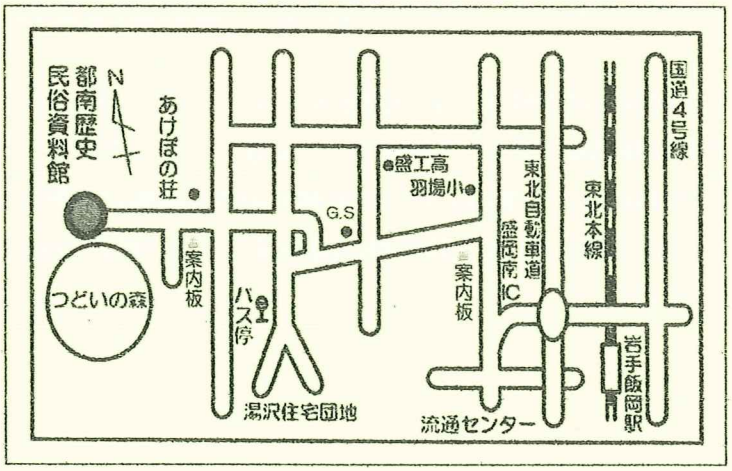
・平成２５年度盛岡市都南歴史民俗資料館市民参加展について

・資料は語る㉟

・盛岡市所在
指定・登録文化財紹介㉟

・となんの昔ばなし㉟

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間　午前９時から
午後４時まで

入館料　無　料

休館日　月曜日
(休日に当たるときは、
直近の平日)
年末年始

都南の遺跡（その3）

盛岡市都南歴史民俗資料館　館長　玉川英喜

盛岡市都南地域の遺跡について、Ｖｏｌ133 に引き続き、今回は奈良・平安時代の「高舘古墳」と「飯岡才川遺跡」を紹介します。高舘古墳については、最初の調査が行われたのが戦前の昭和８年で、都南地域における古代遺跡調査の先駆け的なものといえます。飯岡才川遺跡の調査は近年のもので、いわゆる盛南開発に伴い平成 10 年代に数次わたって行われています。

都南地域の奈良・平安時代の遺跡については、古くから土師器等を出土する場所が数多く知られていました。ちなみに昭和 49 年発行の都南村誌には、そうした遺跡が 54 ヵ所列記されています。また、終末期古墳にあたる群集墳についても、「高舘古墳」「大道西古墳」「蝦夷森(通称)古墳」の３ヵ所記載されています。終末期古墳は北東北に多くみられ、市内には他に「太田蝦夷森」「上田蝦夷森」などがあります。終末期古墳の年代は概ね７～９世紀と考えられています。

近年は、いわゆる盛南開発等の進展とともに、奈良・平安時代の遺跡が数多く調査され、Ｖｏｌ133 で紹介した飯岡沢田遺跡の古墳、今回取り上げる飯岡才川遺跡の集落跡等々、当時のこの地域の状況をより具体的に窺い知ることができる貴重な発見が相次いでいます。

なお、以下の記述にあたっての引用・参考文献は次のとおりです。

・都南村「都南村誌」(1974 年)
・岩手県文化財愛護協会「都南村の歴史」(1988 年)
・岩手県文化振興事業団埋文調査報告書第 393 集「飯岡才川遺跡第３次発掘調査報告書」(2002 年)
・岩手県文化振興事業団埋文調査報告書第 515 集「飯岡才川遺跡第 12 次発掘調査報告書」(2008 年)
・岩手県文化振興事業団埋文調査報告書第 580 集「飯岡才川遺跡第 16 次発掘調査報告書」(2011 年)

【高舘古墳】

高舘古墳は飯岡山のふもと、北東方向に張り出した丘陵の一角にあります。現在も墳丘が一基残存しており、地表面から観察できる数少ない古墳の一つです。

昭和８年県史跡調査員菅野義之助氏らによって実地踏査され、蕨手刀２振り、切子玉、鉄製轡(くつわ)などが見つかっています。昭和 42 年には小岩末治氏によって一部調査が行われ、川原石積みの石室等が確認されています。高舘古墳から出土したとされる蕨手刀が現存しているかどうかは不明です。都南地域から出土した蕨手刀で現存が確認されているのは、昭和 10 年頃出土したとされ、昭和 49 年に都南村指定文化財（現盛岡市指定）となった三本柳の大道西古墳のものです。

菅野氏が高舘古墳を実地踏査した際の状況については、当時このことが岩手日報で報道され、都南村誌にもその記事を引用しながら記載されていますので、その一部を紹介します。

昭和８年９月３日、県史跡調査員菅野義之助の調査結果が、９月６日の岩手日報に「奈良時代の遺跡、紫波飯岡で発見、宝庫陸奥の移民集団地帯、菅野氏らが 発掘」と見えている。その要旨「此の地には六個の古墳があったが、…(中略)…。 古墳はこのたびの雑林を伐採開墾にあたり発見されたもので、径２間(約 3.65m)、高さ約５尺(約 1.5m)、中に土師の器、陶の器、および蕨手の太刀、切子玉、鉄製の轡(くつわ)等が完全に埋蔵されている。」

菅野氏は語る。「飯岡小学校長佐藤泰次郎氏が土器の一部を携えて来盛、私に詳らかに話してくれた。いままで判らなかった奥郡開発移民の古跡が発見されるかもしれないというので、実地踏査した結果、当時の移民が使用した蕨手の太刀等が確かめられた。これで史実には載っていない奥羽開発移住民の遺跡が発見された訳である。未だ東北にはこうした古墳遺跡の確然としたものが発見されていないから大したものだ」とある。　　【都南村誌Ｐ52・53から抜粋】

【飯岡才川遺跡】

飯岡才川遺跡は盛岡市飯岡新田にあり、東西600m、南北300m位の範囲に広がる遺跡です。東端は盛岡スコーレ高校から150m位の所です。この遺跡は主に奈良・平安時代のものが中心で、数次にわたる調査によって、その時代の竪穴住居跡30棟余り、掘立柱建物跡７棟、他に古墳などが見つかっています。住居跡の多くは平安時代で概ね９世紀から10世紀初め頃のものですが、奈良時代のものもあります。

志波城造営は803年ですので、その時代背景となる一般集落の状況を窺い知ることができる遺跡でもあります。特に３次調査で見つかった２間四方の４棟の掘立柱建物跡は類例も少なく、集落の構成を考えるうえで貴重です。掘立柱建物跡について、発掘調査報告書では「住居跡と同時期に存在したと思われ」、「集落にともなう貯蔵施設であった可能性が高いと考えられる」、さらに「周辺の遺跡から同様の建物跡が確認されているが、本遺跡のごとく複数棟が並列して配置される類例は今のところない」と報告されています。もし仮に、集落の共同施設としての貯蔵庫ということであれば、当時のコミュニティの在り方を探るうえでも興味深いものがあります。

古墳は遺跡北端部で７・12次調査の際、24基見つかっていますが、Ｖｏｌ33で紹介した古墳・円形周溝等が40基余り見つかった飯岡沢田遺跡は、この遺跡の直ぐ北側に隣接しています。

出土遺物には土師器、須恵器、鉄製品、土製品などがあります。土器類については坏(つき)の中に墨書あるいは線刻のなされたものが見つかっていますし、須恵器の出土量が比較的多くなっています。鉄製品には刀子などがありますが、12次調査では祭祀具と考えられる「鐸(たく)」が５点見つかっています。

第３次の調査報告書では「該期の集落例と趣を異にする」と報告されていますが、その後の７・12次調査や飯岡沢田遺跡調査での一連の古墳、貯蔵施設と考えられる掘立柱建物跡の存在、出土した遺物の特徴等々、志波城の背景等を種々考察してみるうえで大変興味深い遺跡といえます。

平成25年度盛岡市都南歴史民俗資料館市民参加展について

盛岡市都南歴史民俗資料館では現在、市民参加展「鎌田隆コレクション　郷土画家が描いた絵葉書展」（平成25年４月27日～７月７日）を開催しております。中井汲泉の人物を中心とした愛嬌のある染め絵、舞田文雄の静物を対象とした版画、真壁次郎の柔らかい筆致で描かれた風景が絵葉書として展示され、懐かしい盛岡が見られたと来館者からご好評をいただいております。

また、次回の企画展「澤井敬一コレクション　珍品・稀書でたどる盛岡展（仮）」（平成25年９月14日～12月１日）は只今準備中ではありますが、現在も活躍されている盛岡芸妓に関する大正・昭和期の豊富な資料や、鈴木彦次郎の直筆原稿など貴重な資料を多数展示する予定です。

当館の職員一同、皆様のご来館をお待ちしております。

資料は語る㉟

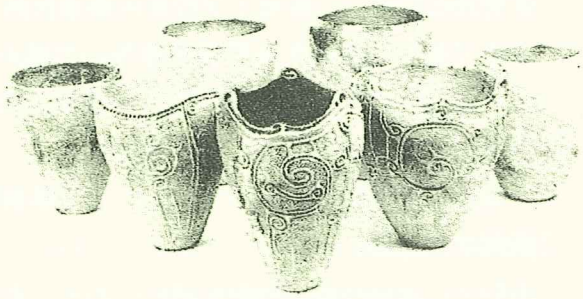
【地券】

明治6年(1873)、政府は土地と租税に関する新たな政策として地租改正を実施しました。その政策は、前年に交付された壬申地券に代わり、土地の所有者に所有権を証明する新たな地券を発行し、地価の3%を地租として課税させ、主に米を納める物納から金納に改めるという内容のものでした。

当館所蔵の地券は、明治9年(1876)に岩手県より発行されたものです。旧都南村では明治8年頃に田畑や宅地の測量が終わり、それを基に地券が発行されました。記載内容は、住所、所有者名、地目、段別、地価、地租で、裏には地券により土地の所有権が証明されるという記載がされています。

地券の発行は、明治22年(1889)の土地台帳制の移行に伴い廃止されます。この資料は、地租改正実施初期の地券として貴重な資料といえます。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介㉟



深鉢形土器(盛岡市繋字館市出土)7個

昭和26年(1951)8月、当時の繋小学校の校庭整地工事が行われた際に、縄文土器7個体が出土しました。

出土した土器は、縄文時代中期(約5,000～4,000年前)の深鉢で、3個体は器面全面に隆沈線による唐草状の大渦巻文を中心に小渦巻文や懸垂文が描かれています。他の4個体の底部中央には、焼成後、意図的に穿孔されています。他の遺跡での発掘調査事例と同様に、この7個体も底部に孔をあけた深鉢を上下逆さにして埋設した伏甕と考えられています。

参考・引用資料：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』、2008。

『砂子塚』　となんの昔ばなし三十五

羽場に、砂子姫と称する一基の塚があり、この塚は元亀の頃、飯岡舘が斯波安芸等に攻略されたとき、城主の娘砂子姫が、大奮戦をして勇名をとどろかせ遂に戦死してしまいました。当時の武将たちは、その功績を称え供養のために戦死した姫に甲冑をつけ、そのまま埋めた塚であると伝えられています。「志和軍戦記」の中に記されている一文を抜粋すると、

「飯岡庄太郎が娘砂子とて、男勝りの女あり、この女、戦の有様を見るよりたまりかね、さらば一合戦戦い仕らんと装束いたし、小桜おどしの大鎧着るままに、白檀の脚当、白鉢巻をしめ、五尺二分（約一・五メートル）立ちたる駒（馬）に金覆輪（きんぷくりん）の鞍おかせ、虎の皮の泥障（あおり）、熊の皮のきんふという鎧ふみこみ、三尺八寸（約一・一メートル）の大太刀、二尺五寸（約〇・八メートル）の打刀前十文字に帯ぶままに大長刀をひっ提げて駒引きよせ、由良由良と打のり敵陣に向って大音声あげ、柳も茲もとへ出でたる某をば如何なるものと思うらん、忝はなくも飯岡太郎が息女砂子も申女なり、敵陣にて我と思わん輩は出合い、勝負を決せんと云うままに、大長刀を電の如くに振り廻し、東西南北、前後左右になって廻る。砂子姫手に掛し、兵士三十八騎一つ枕に切り伏せたり」

と、その奮戦ぶりが記されています。

この塚は、径約五メートル、高さ一メートルの小高い塚です。

出典：『となんの民話』（都南歴史民俗資料館、一九八八）。